

平成20年度 子育て親育て研修大会

1 日 時 平成20年10月21日（火） 13:30～15:50

2 会 場 山口県教育会館大ホール

3 パネルディスカッション

〈テーマ〉 「一人ひとりを大切に！ みんなちがってみんないい」
～発達障害のお子さんの支援についてそれぞれの立場から～

〈目的〉 * PTAの発達障害等の障害についての理解の促進
* 発達障害等の児童生徒及び保護者への支援の充実
* 家庭や地域における発達障害及び特別支援教育についての理解・啓発の推進

〈コーディネーター及びパネリスト〉

- コーディネーター 松岡 勝彦氏（山口大学教育学部准教授）
- パネリスト 田原 卓浩氏（たはらクリニック院長）
西川 浩子氏（山口県LD親の会「ほっぺ」顧問）
奥原 保彦氏（防府市立佐波小学校教諭）
江田 良市氏（ふれあい教育センター研究指導主事）



パネルディスカッションを始めるにあたり、「発達障害の特性と学校や家庭の支援のあり方」について、コーディネーターの松岡氏からの講話。

・LD、ADHD、自閉症、アスペルガー等の発達障害を持つ子どもたちには、仲間との同じ行動のとりにくさや、自己コントロールの困難さがある。また、二次的障害として「不登校」や「いじめ」につながることもある。
・ちょっと気になったら早めに相談機関に相談するなどして、早期からの適切な支援が大切である。

・まずは、発達障害の特性について理解していただきたい。

* **LD（学習障害）**：学業不振ではない。「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」、「推論する」、「算数」が苦手という認知面での障害からくるもので、本人を責めない配慮が必要である。

* **ADHD（注意欠陥多動性障害）**：年齢相応の域を超えた多動性、衝動性という行動面での障害がでてくる。本人には悪気はなく、周りからの叱責に本人は傷ついてしまう。

* **自閉症**：社会性の障害である。人付き合いや人とのコミュニケーションが上手ではない。思ったことをそのまま口に出してしまったり、特定なものへのこだわりや刺激に対する過敏性がある。本人には悪気はない。そのことが原因でいじめや不登校につながることもある。より適切な表現や行動を教えることが大事である。

＊**アスペルガー症候群**：知的な遅れはなく、コミュニケーションや社会性、想像力に困難さがある。少年事件からの誤解もある。この障害を持つ子どもたちは犯罪とは対極にあり、「ルールは守るべきだ」という意識が強い。

・次に、発達障害のある子どもたちは、まじめで正直者である。周りの大人たちが発想の転換により、できるだけ早い時期から正しくかつポジティブ（肯定的・前向き）な理解をすることが必要であり、適切な指導・支援を継続的に導入することが大切である。

・対応の原則としては、よいところは大いに認め、そうでないところはある程度は受け流し大目に見てやる。そして、どうすればよいかというやり方を具体的に教えてあげることである。

・最後に、「特別な教育的支援」と「特別扱い」とは区別する必要がある。それぞれが自分の困難な目標に向かって取り組もうとする姿をみんなで応援するクラスや世の中に、できないことをバカにしたり、がんばっていることをからかったりするのではなく、応援したり励ましたりするクラスや世の中にしていけないといけない。みんなに同じやり方で指導するのではなく、結果としてみんなが同じようにわかるような指導をしてほしい。障害の有無にかかわらず、一人ひとりの子どもがわかる指導が必要であり、その子の特性を知り、その子に合った指導をしてほしい。そうすると、特別支援教育が「特別」でなくなる日がくる。

《パネルディスカッション》

〔本日のテーマと関連した日ごろの取り組みや意見〕

田原氏：学校・地域・行政・医療機関が意見を交換しながら、支援づくりが必要である。学校では、障害のある子どもとその保護者、障害のない子どもとその保護者がいる。障害のない子どもとその保護者はいろいろな角度で特徴を理解する。たとえば、広汎性発達障害の特徴として、何か一点には焦点があたるが、そのまわりはぼやける。後ろからその子どもに声をかけると、おどろきパニックを起こしてしまう。しかし、その子どもの前に回ってその子の視覚の中に入って声をかけるとパニックは起こさない。そのようにその子どもの特徴を理解し、その支援の方法を考えて行くと問題は起こらない。

子どもには、得手不得手がある。良いところや上手なことを伸ばしてやる。クラスでも家庭でも、役割分担や何かできることで自信がわき、自分の居場所を見つける。さらに良いところを伸ばすエネルギーがわく。すると、苦手なものもそのエネルギーに引っ張られて伸びていくようになる。

地域では、子どもと向き合い、子どもの言葉に耳を傾けてやることが大切である。そして、地域の力が支援の力になる。子どもに声をかける。あいさつをする。無視されたり、拒絶されたら今度は言い方を変えて声をかけてみる。やっているうちに知識が増える。そうすることで地域の力が進化する。そして、潤滑なネットワークができる。

なぜ、パニックになったのか。それをチャンスに捉えて、知識や技術を得ることが大事である。

西川氏：三人の子どもを持つ親である。一番上の子は高2の自閉症児で、2～3歳で障害が

わかった。二番目の子は中3、三番目の子は小6です。そして、子どもとの関わりから発達障害を勉強した親としてみなさんに話ができるようになった。

発達障害の発症率は6.3%といわれているが、障害の範囲をもっと広げてみると10%程度にまでなる。以前は、障害のある子どもを別のところ（例えば施設）で教育しようとしていた。しかし、クラスに10%もいると、排除するわけにはいけなくなった。一緒に生きて社会をつくっていかないといけなくなった。

私たちがどういう社会にしたいのか、障害のある子どもたちを活かすのは、周りの支援次第である。障害のある子はその子のせいではない。周りは責めてはいけない。特別なことではない。周りの誰かがちょっとした支援をすることである。

まずは、子どもたちの「特長」を知る。私たちの中にも「特長」を持っていることを知り、そしてそれをうまく活かすことが大事である。

奥原氏：通級指導教室の担当で、地域コーディネーターもしている。地域コーディネーターは、各学校を巡回し、特別支援教育の推進に関わる助言を行っている。また、気になる子どもへの支援や対応の仕方についての相談も受けている。

各学校を訪問して感じることは、具体的な支援方法に関する助言のニーズが高まってきているということである。

例えば、座って話を聞いているときに、席を離れてしまう子どもがいるとする。様子を見ると、いろいろな刺激が気になったり、話の内容が分からなかったりすることがきっかけになっていることも多い。そこで、教室の環境を整えたり、理解しやすい伝え方を工夫したりするといった支援が考えられる。その行動が起こる状況や本人にとっての意味を考えることが支援につながっていく。

各学校では、校内コーディネーターを中心に、支援方法に関する検討や全校で支援していくための校内体制の工夫が行われている。また、「個別的教育支援計画」の作成や「専門家チーム」の活用等が始まっている。連携しながらみんなで支えていくという仕組みが動き出している。

江田氏：『ふれあい教育センター』では、幼稚園（保育園）から高校までの相談を受けている。

保護者の方が、相談に来られるまでに悩むことも多く、相談すると、心配していたこと（障害の疑い等）が本当になってしまうのではないかと、特別支援学級に入らないといけなくなるなどと考え、相談への一歩がなかなか踏み出せない。

そんな時、相談者（保護者）の味方になったり、悩みや苦しい想いを共有してくれたりする人が身近にいることが大事である。

なお、どんなときに相談したらよいかというと、子どもにどんなに働きかけても通じないとか、子どもの行動が理解しがたいことが続くようなら早めに相談するとよいと思われる。

それは、子どもたちが必要以上に「自己評価」を下げてしまわないため必要だからである。

仮に子どもたちが、周りから否定され続けると、どんどん自分の評価を下げ、何に対しても向き合えなくなる。ものや課題に対しても、人に対してもである。そこで出てくる言葉が

「どうせ」という言葉である。自己否定から自分を信じてことができなくなり、まさに自信を失っていく。そして、他人も信じてできなくなる。これらのことを防ぐためにも、早期に相談できるとよいと考える。「早期発見・早期対応」が重視されるゆえんである。ただ、言葉としては「早期出会い」というのがよいと感じている。

〔それぞれの立場からの意見がだされた後、さらに本日のテーマを深める〕

江田氏：相談を受けていて、気になるのは「どうせ」という言葉である。この言葉をよく使うようになると、エネルギーの低下を起し始める。心と身体は切り離せないで、その子なりの様子（身体症状や元気のある・なし等）を周りの人が観察していくとよいと考える。

そして、周りからの必要な援助を受けながら、「〇〇があれば、乗り越えられる」自分を発見する。将来身に付くかもしれない力ではなく、「今ある力」を使ってその場を何とかやりくりして乗り切ることが大事と思う。これは、障害のあるなしに関わらず、誰もが援助を受けつつ、苦手さをやりくりして暮らすために大切なことで、苦手さに援助を受けることは、決して恥ずかしいことではないと思われる。

また、子どもの「居場所」をつくることも大事と考える。そのために、家族やクラスの一員としての役割を見つけることも大切にしていきたい。

このような取組を積み重ねることで、「どうせ」という言葉を減らせると考える。

なお、子どものストレス発散方法を見つけることも必要である。

奥原氏：学校での支援を考える上では、学級づくりと個別的な支援の両方が大切である。得意なこと、苦手なことは一人一人みんな違う。困り方も人によって違う。それを認め合い、支え合っている学級をつくりたい。また、教室の環境整備、生活や学習の目標・ルールの明確化、分かりやすい授業の工夫も必要である。これらは、すべての子どもにとって取り組みやすい学校生活につながる。

個別的な支援は、分かった、できたという達成感を味わえるようにし、学級への参加のエネルギーにつながるものにしたい。

西川氏：まずは、子どもをほめる。

引きこもりや自殺する人は全国に何万人もいる。生きる力が弱く、自分に自信がなく、社会に出て行く勇気もない。それは社会の損失である。そのことは、発達障害を持つ子どもへの支援と共通している。

アメリカでは、文字の読めない人でも、話をしたら自信を持って話す。

子どもたちは、他の人とは違った質問をする。いかに他の人と違った質問をするかを先生は評価しほめることで、子どもも自信になる。

障害を持つ子どもは、自分ではがんばっているつもりでいる。それを正当に評価されず、さらに怒られる場面が多い。

たとえば、いつもは席についてじっとしてられない子どもが、席についてがんばった。努

力してがんばったことを正当に評価し、ほめてあげる。その小さなことが子どもに自身を与え、社会を変えていく。

その子の持っているよいところ（力）を伸ばすことは社会にとってはプラスになる。その子の状況をみて評価してあげる。

田原氏：子どもの特徴をいかに活かすか。

大人の役割が重要である。特に高齢者などのボランティアの支援者のパワーを活用する。ADHDに特化することではあるが、服薬などの医療行為は節度を持って対応する。

よいところを伸ばすとともに、ダメなところをあきらめることも大事である。

松岡氏：パネリストのお話から、発達障害に関して正しい理解をし、自分のできることは何かを考えることが大事だということを具体的に教えていただいた。



〔研修会参加者からの意見〕

発言者1：小5のADHDとLDの障害を持つ子どもの保護者として、親の視点から言わせてもらう。

子どもの障害は3歳のときにわかった。その当時は保育園にも子どもの障害を理解してもらえなかった。

親としてこの子を認めることからはじめた。そして、他の親にも認めてもらい、保育園にも認めてもらった。そして、小学校に特別支援学級をつくった。

小学校では、低学年のときは学校任せではダメだった。親も学校に行って一緒に対応したが、今では落ち着いている。

まだまだ社会の中で理解は足りないと思う。このような機会を通して他の親に理解を深めてもらいたい。地域の目については、まずは親が認めて強くなることである。

〔研修会参加者からの意見を受けて〕

西川氏：子どもがいるから楽しいし、子どもがいるから恩恵を受けている。子どもが健常児だけなら味わえなかったことが味わえている。困っている姿ではなく、楽しんでいる姿を周りに出していくことで自分の世界が広がる。障害のあるなしに関わらず、楽しさを感じられる家族はうまくいっている。お荷物ではない、困っている姿ではない、子どもと一緒に得られた喜びを周りに伝えることが社会を変える。

これから高齢化社会を迎えて、自分と違うものを受け入れる社会につながる。

〔研修会参加者からの意見〕

発言者2：アスペルガー症候群の子どもを、友だちに持つ子どもの親として、体験談を話したい。その子は複雑な家庭に育ち、他の子どもたちとはトラブルが多かった。その子が原因で学級崩壊にもなった。しかし、いつもなぜかその子は自分の子のそばにいた。自分の子とその子が小5のとき、自分の子は誰にも相談できずに自分で何とかしようとしていた。学校の先生も心配はしてくれるが、どうしたらよいかというアドバイスをしてはくれなかった。自分の子が中1になったときに、やっと「僕は2年間で対応の仕方を獲得した」と打ち明けてくれた。

親として、周りの援助者として、もうちょっと早く何らかの支援ができていたらよかったかなと思う。

〔まとめ〕

江田氏：今後の支援を考えていくにあたり、「自助資源」も大切にしていきたい。これは、自らを助ける資源ということである。支援は、いろいろな人や周囲だけが整えてくれるものではなく、子ども自らも、自分の長所や能力を知り、それを生かして乗り越える経験も必要だということである。

奥原氏：キーワードは「つながり」である。気づきを支援に“つなげる”ということ、そして、子どもを中心に、保護者、学校、関係機関、地域が“つながる”ということである。支援のための「つながり」の仕組みが動き始めている。これからはその実効性が問われる。

西川氏：「ほめる」をキーワードにしたい。ほめられて育っていない日本人は、ほめることは苦手である。

ほめようと思えば、相手のいいところが見えてくる。家庭も自分の人生も楽しくなる。それが社会を変えていく。

田原氏：コミュニケーションによる理解と支援が大事である。

一つは、子どもとのコミュニケーションである。まずは、子どもの考えを直接聞くという姿勢を大人が見せることが大事である。

もう一つは、周りの大人たちがそれぞれコミュニケーションをよくとることが大事である。

そして、同じようなコンセプトで対応できるようになればよい。

松岡氏：パネリストの方々それぞれの立場から、貴重な意見がだされた。今日の研修会を機会に、みんなのできることから一つずつやっていくことが大事である。